

(国語科)

「主体的に学び、表現し合う子どもを育てる」

—物語文を通して書く活動に親しむ—

大阪市立巽東小学校 千島芹菜

1. 研究主題設定の理由

本校では、【豊かな心を持ち 主体的に取り組む たくましい子どもを育てる】を教育目標とし、日々の教育活動を進めている。令和3年度から国語科の研究を始め、ICTを活用した学習形態の工夫やワークシートの活用を工夫することで児童に関心を持たせ、楽しんで国語科の学習に取り組むことで学校全体として主体的に学習に取り組む児童が増えてきている。しかし、登場人物の気持ちを読み取り書くことができるようになってきてはいるが、自分で考えたことを書いたり、自分の言葉でまとめたりする力はまだまだ定着していない様子が見られた。

そこで、引き続き「主体的に学び、表現し合う子どもを育てる～物語文を通して書く活動に親しむ～」を研究主題とし、国語科の研究に取り組むことにした。令和4年度は物語文の学習の中で、学習に対する感想やまとめを書く時間に焦点を当て、児童が「書きたい」「書いたことを伝えたい」と思わせるような指導のあり方について研究を進めることにした。

2. 研究の趣旨

令和3年、4年度の経年調査児童質問紙にある設問「国語の勉強は好きですか。」や「国語の授業の内容はよく分かりますか。」では、肯定的な回答が多いにもかかわらず、記述問題の校内正答率が50%を下回る学年が多く見られた。また、無回答率も10%程度見られることが分かった。そこで、国語科の時間を通して、「書く」活動に親しむために①意欲を生み出すような指導方法の工夫②主体的な学習活動を促すための工夫③基礎・基本の定着を進め、主体的に学び、表現しあう子どもを育てることをねらいとした。また、指導者自身が教材文を分析し、「書く」活動を深めるための発問の精選や、ノート指導の徹底、具体物やICT活用など学校全体で取り組むことで、児童に書くことの楽しさや伝えることの楽しさを感じることができるよう授業展開を進めている。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 書く活動

指導者自身が【教材文分析】(教材文をよく読み、単元のねらいや文型、筆者の論の展開などについて分析)することが重要である。その中で見えてくる、作者の仕掛けや文中で使われている言葉の仕組みを指導者自身が理解し、児童が自分の考えや登場人物の気持ちを書きたいと思わせる発問やノート指導などの工夫について考える。

視点② ICT活用

「書く」活動に親しみ、進んで書こうとする児童の意欲を高め、児童に「書きたい」という意欲を持たせる。そのために、主体的・対話的で深い学びを実現するためのツールとして、学習者端末を始め、デジタル教材など単元を通して、どのように活用すればいいのかを工夫する。

視点③ 基礎基本の定着

国語科における基礎基本の定着を図るために、語彙力の育成、国語辞典・漢字辞典の活用、読書の習慣化を目ざした取り組みを行う。

●語彙力を高めるための工夫

- 朝学習や放課後の時間を活用し漢字プリントの実施
- 国語辞典や漢字辞典の活用
- 漢字プリントの活用（全学年）

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- 具体物の掲示や物語に関連する資料や図書、同じ作者の物語などを学級に置くことで児童の意欲関心を引き出すことができた。
- 文字数の制限を設けたり、穴埋め型のワークシートや文章中の言葉を用いて答えたりするワークシートを何度も繰り返し活用することで、経年テストでは、記述問題の無回答率が減少するなど効果的だった。
- 学年に応じた、ノート指導を徹底することで、書こうとする意欲の向上が見られた。書く力を高めることで、物語に深く入りこんで考える姿がみられた。
- タブレットを用いて、ワークシートの内容やノートの内容を大型テレビに投影することで、児童の考えを全体で交流できたり、それぞれの意見や読み取った内容を比較・検討したりできるようになった。
- 3年生以上の学年では、国語辞典を活用した意味調べを行った。辞書を引く習慣を定着させることで、辞書の引き方が早くなり、たくさん意味のある言葉では、どの意味が物語に出てくる言葉に適しているのかを選別することができるようになった。
- 漢字の読み書きの定着を図るため、朝学習の時間や学習の始めの時間に漢字の学習を行った。経年テストでは、漢字の読みの部分において、正答率が上がったこと、無回答率が減少したことなど少しずつ成果が見られた。

（2）今後の課題

- 書く活動では、指導者の発問に対する自分の考えや、文章中から読み取ったことを書く際に、手が止まり困り感をだす児童がいたため、授業の中で、困り感のある児童にどのようにアプローチをしていくか、どのような個別の支援が必要かを考えていく必要がある。
- ICT活用では、児童が使う際に、タブレットの扱いに慣れていない場合は、手間を取り発表まで行きつかなかったり、自分の書いた考えを共有できずに学習を終えてしまったりする児童もいることから、事前にタブレットに慣れさせ、日頃から使える環境を整えていく必要がある。
- 基礎基本の定着では、漢字だけ書くことができていても、文章中にどのように使われているのか、場面に適した漢字はどれなのかを知っておく必要があるため、作文指導や文章構成の指導の中に、漢字をたくさん使う機会を増やす取り組みをしていく必要がある。